# ＦＤと学生力

## ── 岡山大学　学生・教員ＦＤ検討会の１年 ──

橋　本　　勝
（岡山大学教育学部）

# FD and Power of Students

Masaru Hashimoto
(Faculty of Education, Okayama University)

**Summary**

The purpose of this paper is in introduction of the outline of CSTOUFD; Committee of Students and Teachers in Okayama University on Faculty Development.

CSTOUFD is the public organization established in July, 2001. The members of CSTOUFD are recommended at each faculties of Okayama University. They have argued constantly on many problems on FD. For example, Syllabus of Okayama University is improved by this argument.

The activities of CSTOUFD are independently managed by students, and chairman of this organization is a student.

Generally FD tends to be considered directly regardless of the students. However, considering the essential character of FD, the authorities of each faculties should respond to the various opinions of students. FD must be more effective by utilizing the power of students.

The significance of CSTOUFD will become larger and larger. I expect that the similar organizations will be established in other universities.

## １．はじめに

2001年７月、岡山大学の学務部にある事務局第２会議室は、大勢の報道陣を集めて一種異様な雰囲気に包まれていた。普段その部屋には縁遠いはずの学生が数十名とＦＤ関係の教員が約10名、それに学長・副学長等の大学トップが同席するという一風変わった会議が始まろうとしていたのである。その会議は、ＦＤの推進にとって学生の積極的な関与が不可欠と考える岡山大学が、全国の大学に先駆けて設置した組織「学生・教員ＦＤ検討会」の設立総会であった。（資料１参照）

本稿は、設立から１年を経過した同検討会の１年を振り返りながら、岡山大学が何を目指して、そのような組織を作ったのか、１年間の活動でその目標は到達できたのか、あるいは、何が問題として浮かび上がってきたのかを総括し、今後に向けての展望を述べようとするものである[1]。

## ２．学生・教員ＦＤ検討会の設立の経緯

話は更に１年前にさかのぼる。2000年の夏、何人かの学生に、秋に予定されていた「第８回全学シンポジウム」[2]の実行委員になってくれないかという要請が行われていた。クラブ・サークル活動の総括組織である校友会や生協の学生役員などに声がかけられたのである。「全学シンポジウム」とは何かもわからぬままに参集した学生４名は、ＦＤ専門委員会の委員３名とともに同シンポジウムの企画に関わっていくことになる。話し合いを進める中で、教養教

育で行われていた「総合科目」のあり方をテーマとし、教員の側からと学生の側からの両方の視点で総合的に討論するという内容に落ち着き、やがて学生たちは報告に向けて独自にアンケートをとるなど活発に準備を重ね、11月のシンポジウムは大いに盛り上がり、例年以上に大きな成果があった。

さて、シンポジウムの反省会で、学生からこんな声が上がった。「この種のイベント的な関わり方では何か不完全燃焼という印象です。我々の意見をもっと広範な範囲で集約する意味からも、恒常的に活動できる組織を作ってもらえませんか？」実は、ＦＤ専門委員会では、こうした声が学生自身から出てくることを期待して、シンポジウムの実行委員に学生を加えていたのであるが、その意味では正に期待通りの反応であったといえる。

そこからは、話はとんとん拍子に進んでいく。まず、ＦＤ専門委員会の中に設立準備会を作り、正式な大学の組織とする為、規約の整備や諸会議での正式提案等の手続きを進める一方、学生の主体的な組織という側面と全学の学生代表からなる組織という側面のバランスに配慮しながら、学生委員の人選を進めていったわけである。結果的には、全11学部と法・経済の２学部に設置されているⅡ部から各２名ずつの計26名の学部推薦委員と上記のシンポジウム実行委員や校友会・生協からの新たに推薦された委員で学生委員が計34名、これに教員委員15名[3]が加わって設立の運びとなった。無論、戸惑いがなかったわけではないけれども、それについては後述する。

資料１

2001年(平成13年)7月12日

（朝日新聞 岡山版）

## 学生と教員が教育改善へ

### 岡山大に検討会

岡山大学は11日、学生と教員が協力して大学全体の教育改善を進める同大教育開発センター学生・教員ＦＤ検討会を発足させ、第1回会合を岡山市津島中2丁目の大学会館で開いた。学生が運営主体となり大学側も支援して組織的に取り組むのは、全国の国立大学で初めてという。

検討会は、教育改善を考える場に参加できる組織をつくりたいとの学生側の要望と、学生の意見を大学運営に反映させることが重要とする文部科学省の要請を受けて設置された。同大教育開発センターの下部組織として、全11学部と生協、校友会からそれぞれ推薦された学生32人と教員8人の委員で組織。授業改善の企画など委員が協議した結果を同センターに提言し、センターは検討のうえ、改善に生かしていく。

この日は、学生から委員長を学生と教員から副委員長を1人ずつ選出。授業評価、シラバス、外国語教育、新授業科目の企画・提言、勉学環境の5つのワーキンググループを設け、各メンバーを決めた。検討会は月1回程度開いていく。

## ３．なぜＦＤに学生なのか

一般には、ＦＤというと、大学内部あるいは教員サイドの問題であると捉えられ、学生は、授業評価アンケートに回答するなどそれとは間接的に関わるものと考えられがちである。しかしながら、ＦＤを大学の教育全般の改善のための種々の組織的活動の総体と捉えるならば、また、そこでの学生の果たすべき役割や学生のあるべき姿を重視するならば、もっと積極的に学生を巻き込んでいく必要がある。この理由としては次の３点があげられる。まず第１に、ＦＤがそもそも誰のためのものなのかという点である。例えば、「授業能力の資質向上」は決して教員自身の成長が第一義的目標なのではなく、そのことによって、授業を受ける学生が「より理解しやすく」「より意義のある」学習が可能となることが本来の目標のはずである。だとすれば、教員側の改善努力が学生の学習改善に有機的につながるように受益者たる学生の意見を積極的に採り入れることはＦＤにとっては自然な帰結である。そして、授業評価アンケートや意見箱のような形だけではどうしても一方的な調査・一方的な申し入れにとどまりやすく一定の限界があり、むしろ、恒常的にこの問題に関して教員と学生が対話するシステムが必要なのである。文科省が「教員中心の大学から学生中心の大学へ」と主張するのも、このような観点からのものに他ならない[4]。

第２点は、学生自身の意識改革がＦＤには不可欠という要因である。ＦＤを進めて大学教育が変わろうとしても、学生たちがそれに呼応する変化を見せなければＦＤはその意義が半減してしまう。大学教育の大衆化・実践化の進行の中で、学生が自ら積極的に学ぶためには、その気にさせる環境作りが必要である。初等・中等教育では既に「新しい学力観」が浸透し始め、「自ら学ぶ」生徒たちを教員が「学習支援」するという姿勢が強くなってきている。本来、大学教育こそ、このスタンスを持つべきものであったのであるが、過去半世紀の日本の大学教育は、「レジャーランド」と揶揄されるほどの「自由放任」「単位の形骸化」という形でそれを「実践」してしまったきらいがある。また、学生の側でも、大学入学を「受験競争のゴール」視し、それを機に勉学意欲を急低下させてしまう者も少なくないの

が現実である。こうした中で、ＦＤの推進を目指して、ただ単に「出席重視」「ＧＰＡの導入」「単位の実質化」等の処方箋を教員サイドが一方的に打ち出すだけでは、社会的批判をかわすことにはなり得ても学生の真の学習改善にはつながらない。むしろ、学生の学習意欲をかきたて、学生が積極的に学びに目を向けるにはどうするかを学生を交えて本音で論議することを通じて、集団としての学生の意識改革を推進してこそ、ＦＤの実効性が高まるというものである。

そして第３に、こうした活動に積極的に関与することで、学生自身の精神的・知的成長を促したり、積極的な行動力を涵養するという教育的な効果をねらうという面もある。現代の若者は、例えば「指示待ち症候群」というような言葉で代表されるように、受動的側面が強いことが各方面で指摘されているが、人間を育てる場としての大学はそれに対して一定の方策を施すべきである。無論、ＦＤへの関わり以外にも様々な形がありうるけれども、選択肢は幅広い方がよい。学生の中には、大学の教育・授業のあり方に対し、元々一定の関心を抱きながらも、そうした機会に恵まれない為に具体的な行動には及んでいない者が少なからずいる。こうした学生の潜在的な可能性を引き出しつつ、積極的行動力を高めることは、彼ら・彼女らの成長につながるという意味での教育的効果ばかりか、そうした成長が周囲の学生たちに好影響をもたらすという意味での波及効果も期待できるのである。

## ４．委員の選出

学生委員の選出は、初年度は２．で少し触れた通り、学生組織と各学部からの推薦という形をとった。推薦の具体的な内容についてはそれぞれ２名ずつという人員以外は各組織・学部に任せたため、意義や内容が必ずしも浸透しないまま選ばれてきた学生も少なからずいたが、そうなることはある程度覚悟の上であり、実際の活動を通じて、面白味ややりがいを感じ取ってもらうことを期待したのである。もちろん、結果的には、全委員がそうなったとはいえないが、中には期待以上に活躍してくれた委員もいた。尚、初年度ということと継続性という観点から学部推薦委員については２年任期の１年次生と１年任期の２年次生という指定を行ったが、１年任期の委員の中には任期終了の時点で「もう少し続けたい」ということで可能な範囲で手伝う「残留委員」という形で残る者が数名現れた。

統括役の委員長とそれを補佐する副委員長には、上述のシンポジウムの実行委員経験者の３年次生２名に引き受けてもらった。これをさらに補佐し、大学当局や教員側との接触をスムーズに行う役割として教員委員の中からも副委員長が必要となり、これについては私が引き受けることになった。実際の全体会議の場では、教員委員も数多く出席する中で学生の委員長が司会進行を進めるわけである。さすがに最初のうちは緊張もあり多少のフォローが必要な場面が多かったものの、回を重ねるにつれて慣れてきたようで、教員サイドでは発想しにくいような効果的な会議運営を行ったり新企画を提案したりするようになった。また、そうした姿を見て自分もやってみようと思ったのか、年度代わりの新委員長の選出においても、学部推薦の２年任期の委員の中から、比較的スムーズに引き受け手が現れた。まさに教育的効果と言える。

こうした組織は継続性が非常に重要であり、この意味で２年目にうまく引き継げるかどうかが当初から大きな関心事であったが、上記の役員人事以外の新しい１年生委員の選出については、学生からの次の３点の要望を実現することによって、既に２年目の活動にスムーズに引き継がれている。

１）委員任期の改正：当初は教員や事務方の発想で４月からの２年間ということになっていたものを７月からの２年間に変更すること。（入学直後の１年生から新委員を選出することは極めて困難であるためである。）

２）新入生への積極的紹介：ＦＤという概念に少しでも早く接するためオリエンテーションの一部に検討会主催の「履修相談会」及び「ＦＤ検討会の紹介」を開催すること。

３）立候補委員の推薦委員化：関心のある学生を積極的に取り込むため、比較的早い時期から立候補委員を受け付けるとともに、そうした学生を可能な限り学部の正式推薦委員とすること。また、立候補委員が出ていない学部については学部として責任ある推薦を行ってくれるよう強く要望した。

一方、教員委員はＦＤ専門委員会から数名の委員が加わっている他、各学部から最低１名が推薦されるようにしており、現在15名の委員がいる。但し、この組織に対する理解度という点では委員によって学生委員以上に多少の温度差があるのが実情である。また、学生の自主的活動を優先するというスタンスがともすれば教員の積極的参加度という点でも差を生じさせている。さらに、教員委員は任期が明文化されておらず、学部内の事情によって４月に交代す

る学部も少なくないため、新委員は当初の３カ月間は実質的には活動しにくいという問題点も生じている。学生委員の引継ぎがスムーズに行われているだけに、今後、教員委員の引継ぎをどうするかが課題となっている。

尚、事務方の責任者も本年４月に交代した。組織の特殊性ゆえ、サポートの引継ぎがうまくいくかどうかを懸念する声もあったが、こちらはほぼ問題なく引き継がれている。

## ５．活動形態

具体的な活動は、月１回平均で開催される全体会議（全体会）とそれに向けていわば日常的に活動するワーキンググループ（ＷＧ）によってなされている。

全体会は、事務方を通じて全委員に招集をかけて開催される。各ＷＧからの種々の提案を審議・検討する他、委員長を中心とする総務からの提案を全体で審議・検討したり、他のＷＧの活動内容を把握したりする性格のものである。上述の通り、統括・進行役の委員長は学生が務めており、１年目はシンポジウム実行委員であった経済学部３年次生の男子学生が務めたが、２年目は１年目に学部推薦で選出されて活動を重ねてきた工学部の女子学生（２年次生）が務めている。

ＷＧは課題ごとに数名単位に分かれて活動するものである。当初は、シラバス・授業評価・新授業提案・外国語教育の４つが構想されていたが、設立準備の段階で学生からの要望として勉学環境ＷＧが加わった。また、活動開始後、Ⅱ部問題ＷＧが独立した。それぞれの活動概要については後述することとするが、１年を経て現在は外国語教育ＷＧがなくなって５つのＷＧになっている。これは、外国語教育ＷＧが昨年度の全学シンポジウムを念頭において作られたＷＧであったことから、シンポジウムの実施後の活動目標がはっきりせず、当面、他のＷＧに合流するという結論を出したためである。

ＷＧの活動は、メール会議をすることもあるが、学生のメールは大半が携帯電話のため字数制限から十分な議論ができないし、時間を調整して会合を開き直接話し合うこと自体の意義もあることから、月に１～２回程度集まって会議をしている。また、アンケートの実施や集計でまとまった時間をさくこともある。各ＷＧにはリーダーをおき、上記の総務提案の下準備のため、ＷＧリーダーが集まって別途に総務会を開催することもある。いずれの場合も、教員もメーリングリストに加わっており、可能な範囲でＷＧ会議にも出席したりアドバイスしたりする形をとっている。

## ６．検討会の公的性格

１年間の活動成果を概括する前に、検討会の公的性格について少し述べておく必要がある。検討会は、表面上、学生の自主的活動を教員がサポートする形に見える。この点では部活動・サークル活動に近い。また、学生全体を代表し、統括する性格からみると学生会（本学でいうと校友会）や高校までの生徒会に近いようにも感じられる。しかしながら、公的な性格が非常に強いという意味で、これらのものとは決定的に異なるものである。

公的性格は次の３点に現れている。

１）委員の公的推薦：上述の通り、委員の選出は、学部推薦を基本とし、各学部で正式な手続きをふんでなされている。したがって、委員は全学部から選出されているし、例えば活動に消極的な委員を推薦した学部は、場合によっては委員を推薦し直すケースもある。尚、この点は学生委員はもちろん教員委員についてもあてはまる。

２）審議結果の公的処理：検討会の審議・検討結果はきちんと尊重され、学生側の要望としてまとまったものは、教員組織のＦＤ専門委員会を経由して、可能な限りその実現に向け大学が最大限の努力を払う他、全体会の議事は公的文書として事務方によって記録され、他の委員会・協議会等と同等に扱われている。また、例えば、検討会名で多数の教員にアンケート依頼等を出す場合、責任者の氏名が学生であるにもかかわらず、学内便で公的文書として扱われている。

３）活動の公的支援：検討会は定期的な会議よりも、それに至るプロセスとしてのＷＧや総務の恒常的な活動が重要となるが、そのための物的支援として、教官室を１つ転用した検討会専用の部屋を確保したり、パソコン等の備品や消耗品を無償提供するなどの大学側のバックアップ体制がある程度整っている。また、担当事務官の配置も大きな支援といえる。将来的には、他大学の類似の組織の学生との交流やＦＤ研修等への学生の派遣目的で一定の予算を獲得することも検討されている。

こうした公的性格の強さは、特に学生委員の場合、委員としての責任感につながり、活動への関与もより積極的となるし、全体会やＷＧでの発言も真剣度が高くなっている[5]。

## 7．具体的な活動成果

次に、1年間の活動期間の中で、目立った成果をいくつか挙げることにする。

### ①　シラバスの改善

シラバスは学生にとって有用な授業情報でなければならないが、教員側の発想ではどうしてもその観点のみに限定されやすい。ところが学生側の視点に立ってみると、もう一つの重要な要素として「見やすさ、使いやすさ」という観点も浮上する。本学のシラバスは、学部により、冊子型／CD-ROM型／Web情報型に分かれるが、少なくとも現時点では多くの学部では冊子型となっている。そこで、とりあえず初年度は冊子型シラバスを少しでも見やすく、使いやすいものとなるよう検討を重ね、次の2点について改善提案を行った。

1）枠のない箇条書き的な書き方をやめ、枠付きで項目により文字の大きさを変える等、見やすさに重点を置いた改善を行うこと。

2）講義番号順の配列をやめ、開講期・曜日・時限・授業の種類順の配列によって、授業選択にあたって複数の授業を対比しやすくすること。

結果として、教養科目版のシラバスはこの学生の要望を完全に採用した形で改善された他、一部の学部の冊子型シラバスでも、この方向での改善がなされた。（資料2参照）全てのシラバスが一挙に変わったというわけではないため多少の不満は残ったものの、学生委員にしてみれば、自分たちの要望が早速大学側に採用されたという達成感が得られ、検討会の活動の意味が実感できたという意義がある。また、シラバスＷＧ以外のＷＧの活動に弾みをつける好影響ももたらしている。

尚、昨年度は、検討会の実質的な活動開始から冊子型シラバスの原稿提出締切りまでの時間的な余裕がなく、内容に踏み込んだ提案は行っていないが、その後シラバスＷＧでは、シラバスに関するアンケートなども実施し、今後の更なる改善要求を検討している。

### ②　授業評価アンケートに関するアンケートの実施

90年代以降のＦＤの高まりの中で、授業改善を目的とした学生による授業評価アンケートは各地の大学で広く行われるようになっているが、岡山大学でも「授業調査アンケート」という名称で約20項目の調査を98年から全学的に実施してきた。ところが、各教員に「協力」を要請するという形式であったため、必ずしも文字通りの「全学」に広まらず、全体の授業の約3分の2は未実施の状態が慢性化するようになり、学生の間からは「回答したい授業ほど実施しない」というような不満の声が上がるようになった。そこでＦＤ専門委員会は、質問を7項目に圧縮して回答負担を減らした上で、全科目を対象にして学生が自主投票する形式の「授業評価アンケート」に改め、01年度から実施したのであるが、思ったほど「回収率」が上がらずその対応に苦慮していた。

そんな時に動き始めた検討会は、「なぜ学生が授業評価アンケートに非協力的だったのか」「そもそも学生は授業評価アンケートをどう受け止めているのか」等を明らかにしようとアンケートを企画・実施した。その結果、最大の問題点が「後で自宅や下宿で記入して締切日までに回収箱に入れる」という実施方法であったことから、検討会として実施方法の改善を要求することとなった。そこで、今年度実施分からは最終講義時または最終試験時に一定の記入時間を確保した上で、当該講義（試験）終了後に、設置数を大幅に増やした回収箱に入れるという形に変更した。無論、こうした変更は学生の要望のみで実現したものではなく、教員サイドでの打開策の中にもあったものであるが、学生の声が後押ししたという事実は軽視できない。

尚、この「授業評価アンケートに関するアンケート」の実施に際しては、事前の了承を得た上で、教養教育科目の授業時間中に学生委員が入室し、アンケートを実施するという形をとることで、授業評価アンケートが学生の立場からも重要なものであることを印象づけるとともに、検討会の存在をＰＲすることもねらった。この点は、今後、授業評価アンケートの意義をいかに学生に浸透させるかという点でも非常に重要である。

## ２００１年版

【授業科目の区分】総合科目
【講義番号】９１５０６４
【授業科目】作物のルーツと栽培の歴史　Crop and Man - its historical aspect

【学期】後期
【単位】２単位
【曜日・時限】木曜・２限
【対象学生】全
【必修・選択の別】選択必修（学部によっては自由選択）

【担当教官】景山詳弘　（他に　桝田正治　岡本五郎　加藤鎌司）
【所属】農学部　教授
【内線】８３９８
【Eメールアドレス】 ykage @ cc. okayama-u. ac. jp

【授業の概要】
われわれが日常食べ物として利用している作物は，野生植物の中から選抜され，改良されてきたものである．それらのルーツをたどるとともに，その改良の歴史ならびに農業生産技術の発達について述べ，それらが人間の食文化の形成に関わる過程を講義する．
【到達目標】
日常何気なく口にしている食物について，その起源や改良，生産・利用技術の発達の歴史を知ることによって，食について違った角度から見直すようになり，毎日の生活に深く関わっている自分の食習慣や，健康的な食生活について考えるようになる．
【授業計画】
１．「自然ー食ー人間」関係のあり方：景山詳弘
２．身近な観賞植物，キクの持つ二つの顔ー江戸文化の伝承者と舶来の新参者：景山詳弘
３．周年生産の先駆者ーキャベツとハクサイ：景山詳弘
４．日本人の食（文化）を特徴づける根菜類ーダイコン，サトイモ，ゴボウ：景山詳弘
＊１～４についてのミニテスト
５．ウリ科野菜のルーツと改良の歴史ー高級メロンを求めて：桝田正治
６．ナス科野菜のルーツと改良の歴史ー形と色と味を求めて：桝田正治
７．食卓を彩る野菜と食の文化：桝田正治　＊５～７についてのミニテスト
８．ブドウのルーツとワイン文化の発達史：岡本五郎
９．リンゴのルーツとヨーロッパの食文化：岡本五郎
10．モモ，アンズのルーツとシルクロードの果たした役割：岡本五郎
11．日本における果物文化の歴史：岡本五郎　＊８～11についてのミニテスト
12．イネの起源と伝播の歴史：加藤健司
13．コムギの起源と栽培化の歴史：加藤鎌司
14．作物のルーツはどのようにして解明するか：加藤鎌司
15．より良き食材を求めて：加藤鎌司　＊12～15についてのミニテスト
【受講要件】
予備知識・科目は必要ない．食べ物にこだわる人，園芸に関心がある人は受講して下さい
【発展科目】
直接関連する科目はない
【テキスト等】
テキストは用いない．参考書：樋口清之著「日本食物史」柴田書店．神崎宣武著「食の民族学ー日本人は何を食べてきたか」大月書店．藤枝国光著「野菜の起源と分化」九州大学出版会．小林　章著「果樹園芸の世界史」養賢堂．
【成績評価】
４回行うミニテストは１回当たり25点，合計100点とする．
【コメント】
出席して講義を聴いてほしい．新しい知識はたとえ少しでも人間の幅を広げます．
オフイスアワー：景山詳弘（Tel. 251-8398）　金曜日13：30～15：00　農学部１号館２階北側



## ２００２年版

主題科目（自然との共生）　後期　講義番号 911629

| | | |
|---|---|---|
| 【授業科目】 | 作物のルーツと栽培の歴史<br>Crop and Man － Its historical aspect | 木曜・２限<br>選択　２単位 |
| 【主題キーワード】 | 食料 | |
| 【授業内容キーワード】 | 園芸作物，食文化，農業技術発達史，品種改良，遺伝子解析 | |
| 【対象学生】 | １・３・４年次：全　２年次：全（工を除く） | |
| 【担当教官】 | 景山詳弘・桝田正治・岡本五郎・加藤鎌司　【所属】　農学部 | |
| 【Eメールアドレス】 | 景山詳弘　ykage@cc. okayama-u. ac. jp　【電話番号】　景山詳弘　086-251-8398 | |
| 【授業の概要】 | われわれが日常食べ物として利用している作物は，世界各地にその起源をもつ野生植物の中から選抜され，改良されてきたものである．それらのルーツをたどるとともに，その改良の歴史ならびに農業生産技術の発達について述べ，それらが人間の食文化の形成に関わる過程を講義する． | |
| 【基礎となる学問分野】 | 園芸学，作物学，育種学 | |
| 【到達目標】 | 日常生活の中の食物・食材について，その起源や改良，生産・利用技術の発達の歴史などの幅広い知見を得ることによって，食について多面的に認識するようになり，健全に生きることの基本である各人の食習慣や，健康的な食生活について改めて考えるようになる． | |
| 【授業計画】 | １．「自然ー食ー人間」関係のあり方：景山詳弘<br>２．身近な観賞植物，キクの持つ二つの顔ー江戸文化の伝承者と舶来の新参者：景山詳弘<br>３．周年生産の先駆者ーキャベツとハクサイ：景山詳弘<br>４．日本人の食を特徴づける根菜類ーダイコン，サトイモ，ゴボウ：景山詳弘　＊１～４についてのミニテスト<br>５．ウリ科野菜のルーツと改良の歴史ー高級メロンを求めて：桝田正治<br>６．ナス科野菜のルーツと改良の歴史ー形と色と味を求めて：桝田正治<br>７．食卓を彩る野菜と食の文化：桝田正治　＊５～７についてのミニテスト<br>８．ブドウのルーツとワイン文化の発達史：岡本五郎<br>９．リンゴのルーツとヨーロッパの食文化：岡本五郎<br>10．モモ，アンズのルーツとシルクロードの果たした役割：岡本五郎<br>11．日本における果物文化の歴史：岡本五郎　＊８～11についてのミニテスト<br>12．イネの起源と伝播の歴史：加藤鎌司<br>13．コムギの起源と栽培化の歴史：加藤鎌司<br>14．作物のルーツはどのようにして解明するか：加藤鎌司<br>15．より良き食材を求めて：加藤鎌司　＊12～15についてのミニテスト | |
| 【受講要件】 | 特に予備知識は必要ない．食生活や食材について関心を持ち，より広い知識を得たいと考えている人は受講して下さい． | |
| 【発展科目】 | 直接につながる科目はない． | |
| 【テキスト等】 | 教科書は用いない．講義に必要な資料は随時配布する．<br>参考書：樋口清之著「日本食物史」柴田書店．神崎宣武著「食の民族学ー日本人は何を食べてきたか」大月書店．藤枝国光著「野菜の起源と分化」九州大学出版会．小林　章著「果樹園芸の世界史」養賢堂．佐藤洋一郎著「縄のきた道」裳華房．いずれも生協ブックストアにおいて購入可． | |
| 【成績評価】 | 各担当者毎に行うミニテストは１回当たり25点．合計100点として成績評価を行う． | |
| 【JABEEとの関係】 | 地球的視点から多面的に物事を考える能力とその素養． | |
| 【コメント】 | 最近の我々の食生活は，インスタント食品やファーストフードの隆盛に象徴されるように，人間が本質的に生命を維持し，健康に暮らすために必須としている「食べ物」から離れていき，行きすぎた利便性や単純化が進みすぎてきたように感じる．このような状況の中にあって，「食べ物」は本来どのような物であり，人間はどのような食材を求めてきたのかということを，そのルーツを探り発展の歴史をたどっていく中で，再認識するチャンスになればと考えている． | |
| 【その他の項目】 | | |

③　外国語教育に関する全学シンポジウムの企画段階からの参加

そもそも本検討会の設立の契機となった全学シンポジウムとの関わりは昨年度も引き継がれた。テーマは外国語教育についてである。本学の外国語教育の変化についての教員からの報告や卒業生（社会人／大学院生）からみた外国語学習の重要性に関する報告に並んで、学生の立場から大学の語学学習設備（マルチメディア自習室）を利用した感想及び英語教育に関するアンケート報告がなされた。前年の反省も踏まえて、学生がより参加しやすい日程としたことも手伝って約100名の参加者のうち約４割が学生であった。もちろん「全学」を名乗る以上、参加者をもっと増やす必要性はあるものの、従来の教員だけのシンポジウムが教務関係委員が集うだけの性格が強かったのに対し、学生を含めて自主的に足を運ぶ参加者が増えたことは好ましいことである。

尚、今後、この全学シンポジウムは、ＦＤ専門委員会と本検討会の共催から本検討会の主催という形に移行することとなり、学生中心色が一層強まることが期待されている。但し、どういう形式が望ましいかも含めて現在検討中である。

また、外国語教育ＷＧは、その後、英語教育に関する講演会や教養教育の共通テキストの可能性などの課題も検討していたが、本来、シンポジウムの企画の具体化と実施を主目的としたＷＧであったため、シンポジウムの実施後、ＷＧの設置そのものの見直しの声がＷＧ内部から起こり、結局、他のＷＧに合流するという結論になったことは既に述べた通りである。

④　新授業科目の提案に向けての検討作業

学生の発想によって新しい授業科目の開講を企画するということは、本検討会の設置構想時からの特色の１つであり、様々な形で模索が続けられている。

当初はＷＧが提案した授業案シラバスを全学の学生に問いかけるという形でアンケート実施を企画提案したが、全体会において、もっと自由な形で問いかけた方が望ましいという意見が相次ぐなどしたため何度か修正したアンケートが実施されたのは、ＷＧ始動から約半年後であった。全体会では教員も交えて白熱した討議がなされたという意味では非常に大きな意義があったもののＷＧとしてはその遅れが響いて年度内に具体的な提案作業にまでは進めなかった。また、この間、大学側からも「学内自主演習」の単位化が制度化されるなどの事態の変化があり、正式科目としての提案からそちらに切り替えての提案という方向性が検討されている。

近い将来、何らかの形で新授業提案がなされることは確実であり、それに向けての検討作業が進んでいる。

⑤　勉学環境の改善に向けての検討作業

学生の立場からみて、勉学上の様々な問題点を洗い出すため、各委員が自分の周囲の学生から集めるという形のアンケートを実施した。他のＷＧのアンケートがいずれも授業を通じての実施という形をとる中で、周囲の学生の生の声を集めるという趣旨を体現するこの形式は、検討会の認知度を高めることにも寄与した面がある。

アンケートは当面の課題である設備・施設の他、教務関係のサービス面、教育システム面でも行われているが、どうしても、例えば自転車置き場の改善や掲示板の改善といった今、自分たちが現に困っていることが浮き彫りにされやすく、勉学環境の課題として、例えばＡＡ制度やＧＰＡの導入、クォーター制と上限制の徹底といった点については、十分に問いかけられていない。これらの諸点は、今後、学生の視点も加えてじっくり検討すべきものと思われるし、授業時間のあり方や学部を越えた副専攻カリキュラムの制度化など、中・長期的課題は山積している。こうした問題は、いずれも、委員当人にとっては在学中には直接関わらないことだけに検討会としてはとりくみにくい性格もあるものの、後に続く後輩のために同じ学生として何かを真剣に検討するという姿勢はとても貴重なものであって、今後、そうした面での検討も進むことも期待されている。

⑥　Ⅱ部ＷＧの独立と活動

本学には、法学部と経済学部にⅡ部（夜間部）があるが、検討会の設立に際し、Ⅱ部からも学生委員・教員委員を推薦してもらった。当初は、各委員の関心に応じて、他のＷＧに属していたが、Ⅱ部固有の問題が扱いにくいことと時間的な制約から独立したＷＧを作った方が望ましいということになり、その後独立して活動を行っている。無論、

検討会の一部であるという認識から、可能な範囲で全体会にも参加してもらっているし、次の⑦で述べるような検討会全体としての活動にも積極的に関与してもらっている。

具体的には、Ⅱ部固有の問題点として論議されつつある留年率の高さの原因を探るアンケートを実施し、比較的早期に改善可能なものから要求をまとめる作業を展開中である。

### ⑦　新入生対象の履修ガイダンスの実施

検討会の活動開始から約９カ月。学生の発想による全く新しい企画が学生からの方から持ち上がった。新入生を迎えるにあたり、自分たちが入学時に困った経験から、教養教育科目の抽選制度の概略を説明し、その選択のためのアドバイスを行うことを主目的として「履修相談会」を実施しようというものである。話が急であったことと他学部の専門科目の状況まではカバーしきれないという判断から的を教養教育科目の抽選対象科目に絞ったこの企画は、短い準備期間にもかかわらず、担当教員の協力や新入生オリエンテーションの一部に組み込んでくれる学部もあったことが功を奏し、約440名の新入生を集めて好評を博した。また、その後、検討会室等を会場に、可能な範囲で学部別の個別の相談にも応じるという対応も追加したこともあって、新入生に対する検討会の絶好のＰＲとなり、その後の新委員選出にも有機的につながったといえる。

### ⑧　会則の改正

最後に挙げておきたいのは会則を改正した点である。検討会の活動開始にともなって次第に明らかになった検討会会則の不備や欠点を是正するため、拡大総務会・全体会の議論を経て改正を実現した。このことは単なる事務手続き上のことのように思えるが、大学が法規係のチェックも経て正式決定した規定を学生が変えさせたという点で、本検討会の性格を象徴したものといえる。

尚、主な改正点は既に記した学生委員任期の改善や立候補委員規定の創設、ＷＧの位置付けの明確化などである。

## ８．今後に向けて

１年間を振り返ってみると、予想外にうまくいった事柄もあれば、難航している事柄もある。しかし、最も案じていた「次年度への引継ぎ」が比較的うまくいったことは本検討会にとって重要である。なぜなら、学生が次々と代替りし教員も変わっていく中で、本検討会の活動がしっかり根づき、学生と教職員が一体となってＦＤを推進し続けるという気運が大学にしっかりと定着するかどうかが本検討会の最大の課題だからである。

似たような組織としては、例えば千葉大学の普遍教育学生会議[6]等が知られているが、本学の検討会はそれらとは一味も二味も違う組織として着実に歩み始めているといって良い。無論、問題点がないわけではないが、それらを少しずつ解決しながら更に歩を進めたいものである[7]。

６月末に開催された、昨年度の最終全体会で正式な任期を終えた学生委員の一人一人に大学の公印を押した「感謝状」が贈られたが、彼ら・彼女らがいわば１期生として胸を張れる組織であり続けることを目標に今後も積極的な活動が展開されることを期待したい。

## [注]

(1) 本検討会を紹介するものとしては、他に『ＦＤ（ファカルティ・ディベロップメント）が大学教育を変える』（文葉社、2002）の第３章第１節「誰にとってのＦＤか――岡山大学学生・教員ＦＤ検討会がめざすもの――」などがある。

(2) 本学では93年度より毎年１回、主として教務関係の教員を中心に教育問題に関する諸問題を扱う「全学シンポジウム」を教員だけで開催していたが、前年の第７回シンポジウムではパネリストの一人に卒業生を呼んだことから多少の学生が参加し、それがきっかけとなって第８回では企画段階から学生を参画させようということになっていたのである。

(3) 当初は推薦が間に合った学生33名、教員８名でスタートした。

(4) この考え方は、例えば、文部科学省高等教育局医学教育課が2000年６月にまとめた報告書「大学における学生生活の充実方策について」などに顕著に出ている。同報告書では、本検討会のような組織の必要性も説かれている。

(5) 岡山大学広報誌『いちょう並木』第４号（2001年10月刊）では本検討会が特集記事として紹介されているが、そこでの対談記事の中で学生委員の一人がこの趣旨の発言をしている。

(6) 千葉大学のこの組織については、例えば、南塚信吾「大学における学生参加」(『大学教育学会誌』第22巻第２号、2000）などに紹介されている。

(7) この他、金沢大学の「総合科目企画学生委員会」や立命館大学のオリター団活動等、類似の活動が全国で多様に展開され始めており、最近ではそれをつなぐネットワークづくりも試み始められている。